してとりいれたことで，生徒はそれだけにこだわることなく，短歌や近世俳諧⑤など，系統的な学びの中に本単元を位置づけることができたと考えたい。

生徒が伝統的な言語文化に親しみながら，言語感覚を通じて心を豊かにしていく自分自身の姿を実感できるよう，単元開発に今後も努めていきたい。

注

① 拙稿「滋賀大附中版『をかし』『あはれなり』歳時記――古典作品の『ものの見方・考え方』をもとに生徒の『判断』をゆさぶる学習指導の研究――」（滋賀大学教育学部附属中学校『研究紀要』第63集）2021年３月　および　拙稿「短詩型文学の創作を例にして」（『教育科学国語教育』2020年１月号・841号　明治図書）2020年１月

② 短歌・俳句の中にある和語・漢語・外来語については近藤芳美「和語・漢語・外来語――近代短歌におけることばとして」（『日本語学』第３巻第９号）1984年９月や髙橋悦男「外来語と俳句」（『早稲田社会科学総合研究』第４巻第２号）2003年11月・同「季語になった外来語」（『早稲田社会科学総合研究』第５巻第１号）2004年７月などがある。

③ 拙稿「和語・漢語・外来語の語感を生かした俳句創作の単元構成（第三学年）」（『月刊国語教育研究』2021年10月号・594号）

④ 生徒が他の生徒の句を「根拠を明確にしながら論理的に句の優劣の判定」ができているかを評価するといった取り組みとして，國原信太郎「俳句の鑑賞における学習評価について」（『教育科学国語教育』2020年１月号・841号　明治図書）2020年１月がある。

⑤ 本稿の実践後に取り組ませた近世俳諧の単元については，永田郁子「古典学習で「郷土」を見つめる――単元名「『芭蕉好み』を感じとろう」（中３）の実践を通して――」同志社大学古典教材開発研究センター（JSPS 科研費 20K00326）設立記念集会（2021年３月28日（日）・オンライン開催）の発表資料に詳しい。

〔付記〕 本稿は2021年度同志社大学国文学会春季研究発表会（2021年６月20日（日）・オンライン開催）における口頭発表に基づくものである。席上にて，貴重なご指導やご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

⑥・⑧の作者の生徒らは，自分の語彙から季語を掘り起こすのではなく，歳時記の中の季語をもとに自分の「理想の夏」を表現することを試みた。

⑥を選んだ生徒の評	⑧を選んだ生徒の評
•「日の盛り」という和語を使うことで柔らかで穏やかな印象になる。熱量が弱くギラギラしていない，さわやかな夏の暑さが伝わってくる。 •涼しい屋内からドアを開けると肌に感じる暑さを「迎える」と表現しているのが良い。「日の盛り」が周りの言葉になじんで，悪目立ちしていない。	•身近に感じる何気ない四時間目にある小さな幸せが描かれている。 •「薫風」というかための表現でその後に続く「カレー」「四時間目」といった言葉を引き立てている。 •自然の匂いが少し混じった風にさらにカレーが混じるという表現を，風は「薫風」と一語でまとめていてすっきりとした印象。

生徒は例年「薫風」の季節には，グランドで，６月初旬に実施される体育祭の練習にとりくんでいたが，令和２年度の５月はまだ休校期間であり，10月に延期された体育祭も７月の時点では実施は難しいかもしれないと考えられていた。そして，わずかながらの夏休みは，「ドア開けて」の外出も自粛しなければいけなくなるだろうという情勢であった。そのような中でも，生徒らは歳時記を片手に「理想の夏」を表現しようとしていた。

⑥の生徒は「肌を迎える」という擬人法，⑧の生徒は給食の「カレー」という日常的な外来語を表現の中心にしているが，それらを際立たせるのにふさわしい歳時記ならではの季語は，和語・漢語のいずれであるかについて思考をしたことがうかがえる。生徒たちにとってあまり親しみのない季語を用いていても，双方の作者の意図が他の生徒にもよく伝わっていることが評からもわかる。

おわりに

このように，自分が表現したい句の情景にはどの語種が適切であるか，なぜその語種であることが句のよさを醸し出しているのかなどを言語化することで，生徒が自身の言語感覚を豊かにしていった様相をとりあげた。以下は，交流のふり返りの一部である。

生徒Ａ　２年で短歌をつくった時は，視覚で感じたことばかりだったけど，他の触覚や嗅覚で感じたことを俳句にすることで，他の人によりわかりやすく伝えることができると思った。対比や表現技法を使うことでインパクトを感じられ，言葉の響きも大事だと感じた。同じ言葉でも外来語か漢語か和語かで情景の様子の感じ方がまったく違うこともおもしろいと感じた。

生徒Ｂ　和語・漢語・外来語によってそれぞれが句中にどのような印象を与えるのか，考えることができた。また，他の句から学ぶことも多くあった。今回は近代俳句を学習したが，古典の俳句についても学習してみたい。

和語・漢語・外来語のそれぞれの特徴を学ぶだけでなく，俳句創作とその交流の条件と

⑨を選んだ生徒の評 •「ささやき」によって波の穏やかさ（周りの静けさ）が想像できるから。 •「打つ波夏の」のリズムがとても素晴らしいと思う。切れ字の使い方や擬人法などたくさんの要素をとり入れながら，俳句ならではのリズムをより引き立てているので，たいへん素晴らしいと感じます。波の音さえ「理想の夏だ」と共感できる俳句でした。 •「ささやきや」の切れ字は目でなく耳の感覚特有の余韻が残る。

②の作者が描く情景は詳しいものではなかったが，夏の受験勉強の中で味わう一時の楽しい気分を，評者の生徒が「理想の夏」として句から想像できていることがわかる。これまでの生活体験の中で，生徒本人たちが「リズム」という言葉を使う場面の多くが，明るいイメージを持たせるものだったのだろうと想像できる。

この生活体験と語感については②の作者の「紅茶」と聞くと熱いものを連想しがちだという指摘にも通じる。②を選んだ生徒からは非日常的な語彙が情景を演出しているだけでなく，「ピーチティー」の冷たさを生かした擬人法の効果がしっかりと受け手にも届いていることがうかがえる。さらに，⑤の「レインボー」のように「ピーチティー」でも音の響きを指摘する評が見られた。

⑨の作者もまた「シーサイド」=「にぎやかなリゾート地」というように，「シーサイド」を観光業の宣伝の中でよく見かけるという生活体験に，大きく左右された判断をしていると考えられる。①・②は語感の効果を考える言葉を擬人法の中心に用いて，印象を強くしていたが，⑨で人に擬えられているのは「海岸」ではなく「打つ波」である。「海岸」という耳慣れた漢語をはじめに置くことで，中七から続く擬人法や句またがり，切れ字を用いた和語中心に描く情景を引き立てることができている。

4　日常的でない季語への広がり―「日の盛り」「薫風」

⑥	情景　評価B 外へ出かけようとドアを開けると，外の熱気や日差しなど，夏の自分を迎えるように包み込んでくれる様子。 語感の効果を考える言葉　評価A 日の盛り（和語）。違う語種の言葉は「炎昼」（漢語）。しかし，これを使うよりも和語である「日の盛り」を使ったほうが，強い語感を持つ「炎昼」より，柔らかさ，親しみが生まれる。「炎昼」だと漢語で，強さ，インパクトがあるので，包み込まれるという表現に合わないから「日の盛り」のほうがふさわしい。
⑧	情景　評価B ４時間目にグランドで体育の授業をうけていると気持ちのいい風に混じって給食の香りがした。 語感の効果を考える言葉　評価B 薫風（漢語）。違う語種の言葉は「風薫る」（和語）。しかし，これを使うよりも「薫風」としたほうが，なじみが薄いため，「カレー」という日常的な語との対比がきわだつ。

3　生活体験の中の和語・漢語・外来語―擬人法を用いた場合

①	情景　評価B 勉強をしているときに，ふと耳をすますと外から音楽のようなリズムが聞こえてくるので外をみると，雨が落ちてきたときのリズムだったのだなぁ。 語感の効果を考える言葉　評価B リズム（外来語）。違う語種の言葉は「律動」（漢語）。しかし，これを使うよりもリズムを使うことで，あまりかたくならず，テンポが良くなったり，カタカナを使うことで，句に少し親しみやすくなったりする。さらに律動に比べてリズムのほうが読み手からしてもどういった情景なのかなどを想像しやすいから。
②	情景　評価A 夏休みのとある1日。久しぶりに会った友達とカフェに入り，会話を弾ませていたら，いつのまにか注文していたピーチティーの入ったグラスが，汗をかいていた。 語感の効果を考える言葉　評価A ティー（外来語）。違う語種の言葉は「紅茶」（漢語）。しかし，これを使うよりも「ティー」としたほうが少しおしゃれなカフェでお茶をしているような感じがしてよい。「紅茶」と聞くとグラスではなく，カップに入った少し熱そうなものが連想される。この句はグラスに入った冷えたものを表現したかったので，「（ピーチ）ティー」としたほうが冷たくて，時間がたてば水滴が出るように感じる。
⑨	情景　評価A 夏休みに海に行ったときに，遊び疲れ，海岸で休んでいる。やさしい波の音があらためて夏の良さを教えてくれる。やっぱり夏が好きだと感じている。 語感の効果を考える言葉　評価B 海岸（漢語）。違う語種の言葉は「シーサイド」（外来語）。しかし，これを使うよりも海岸としたほうが落ち着いた感じが出る。「シーサイド」とすると，にぎやかなリゾート地が連想される。この句の場合は静かな海岸で波の音を感じているので海岸としたほうが適している。

これら①，②，⑨はすべて擬人法が用いられている句である。

①を選んだ生徒の評 • 嫌なイメージの夏の雨をポジティブにとらえ，「リズム」という言葉を使うことで和語・漢語より軽やかで楽しいといったイメージが表現されているから。自分の部屋などで静かに音を聞いている感じがした。 • 夏の雨が地面に打ちつける音をリズムにたとえて，どんなどんよりとした日でも楽しんでいるように感じられるから。
②を選んだ生徒の評 • ピーチティーという表現が聞きなれていないから，作者がちょっとおしゃれをして友達と大人な気分を楽しんでいるよう。 • 天気や気候の言葉がない中で，「汗をかく」という一言だけで，夏の暑い日にカフェなどでお茶会をする人々の汗やピーチティーの露の画像がすぐ目に浮かんだ。言葉選びが上手く，カフェのおしゃれな感じも「理想」に合っている。 •「汗をかく」という擬人法がただ使ってみただけ，という感じじゃなくて結露が出てくるほど長時間楽しく会話している句の情景に合っている。 •「ピーチティー」と聞くと，一音目に半濁音があるので軽やかでみずみずしいイメージになる。 •「ピーチティー」の発音（イ段，P・T音のとばすように発する感じ）が，楽しく会話を弾ませている感じがする。

⑤	情景　評価 A 夏休みの部活の帰り道，夕立にあって雨やどりをした。その後，雨がやんで家に向かって歩いていると，道に大きな水たまりがあり，虹がうつりこんでいた。それはまるで水たまりの中に，虹がかかっているようだった。 語感の効果を考える言葉　評価 A 虹（和語）。違う語種の言葉は「レインボー」(外来語)。しかし，これを使うよりも「虹」を使ったほうがやわらかくやさしい感じになる。また「日常の中で見つけた少しうれしくなること」をテーマにしたので，「虹」のほうがふさわしいと思う。「レインボー」と使うと派手できらびやかなイメージになり，日常らしさが損なわれてしまう。

このように「真っ青な空にキラキラ輝いて」いて見る者も「気分が上がる」という「レインボー」と，「日常の中で見つけた少しうれしくなること」を「やわらかくやさしい感じ」で表現した「虹」というように，両者はかなり対照的な印象を語種による効果を与えようと意図して詠まれていることがわかる。

③を選んだ生徒の評	⑤を選んだ生徒の評
•「レインボー」で体言止めを利用して強調している。「照らされて」から真っ青な空が連想できる。明るく鮮やかな情景。 •雨がやんで空にパーッと光り輝いている虹と作者の気持ちが重なっているからいいなと思った。レインボーのほうがくっきり，カラフルっていう印象。 •「レインボー」の音の響きが良くてそのきれいで気分のあがる風景がパっと想像できてよいと感じた。いろんな色が見える。 •「レインボー」は最後が伸ばす音になっているため，体言止めの効果がより強調されて余韻を残している。撥音によるリズム感もよい。	•「虹」がやわらかい印象になっていて輝くというより「浮かぶ」イメージに合っている。また，下を向く視点と体言止めがふと見つけた景色を強調している。 •夕立後の人通りの少ない静けさがある場面では「虹」といったような落ち着きのある表現がマッチしている。 •直接見た虹ではなく間接的に見て表現する視点がおもしろいと思った。水溜まりに映った間接的に見る虹は少し暗い。強い光を表すレインボーではなく虹のほうがいい。 •見ると「虹だ！」と言うのではなく，人の少ない中で一人見つけて一人で少しあたたかく感じるというイメージだと考えた。

③を選んだ生徒の評から，作者の意図した情景を思い浮かべさせる句になっているといえる。また「レインボー」の音感による効果を述べているものも見られる。⑤を選んだ生徒の評には，空を見上げるのではなく下を見おろすことで見つける虹という視点の設定のおもしろさについて指摘するものも見られたほか，情景が和語の「虹」の語感によって支えられていることを述べるものも見られた。

③・⑤ともに，体言止めを用いて「レインボー」「虹」をそれぞれ強調しているが，語種の異なりによって，五七五のみで表現する情景に対照的な印象を与えることができるという点を交流の中で実感させることができたと考えたい。

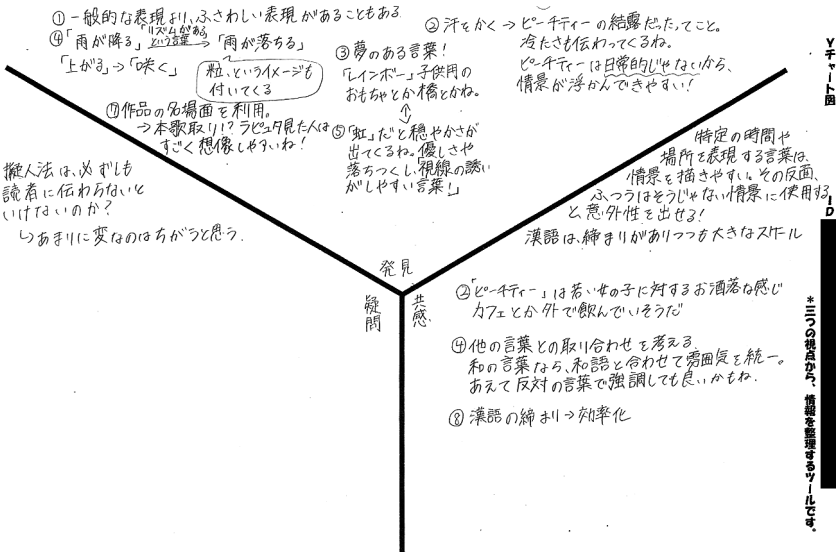

図２　生徒のワークシート・２

ませたかったが，感染対策のため，全体交流とし，どの句を選んだのかを生徒に挙手をさせ，ワークシートに記入したことに基づき生徒が発言するという展開にした。

また，本校では全校的に思考ツールを学習の様々な場面でもちいることができるようにしているが，生徒の多くが自主的にＹチャートを全体交流の中で用いて，発表された他の生徒の意見を整理していた（図２）。

２　「虹」か「レインボー」か―語種による印象の差

③には外来語の「レインボー」が，⑤には和語の「虹」がそれぞれ詠まれている。語種の異なる言葉を用いたそれぞれの句について，作者側・評者側双方の生徒の考えを見ていくこととする。以下が，それぞれの句の作者にあたる生徒のレポートの一部である。

③	情景　評価Ａ ずっと雨が降っていて気分が下がっていたが，強い風で雨雲が吹き飛ばされ，日の光とともに虹が出た。太陽に照らされた虹が顔を出すのを見て，私の気分も照らされたように上がった。 語感の効果を考える言葉　評価Ａ レインボー（外来語）。違う語種の言葉は「虹」（和語）。しかし，これを使うよりも「レインボー」としたほうがキラキラと輝いていて魅力的に感じる。「虹」とした場面，雨がやんで雲と雲のすきまからもれた日光に照らされ，灰色の空に出ているという印象をもつ。この句の場合，風で雲がなくなり真っ青な空にキラキラ輝いているという印象の「レインボー」にしたほうが，気分が上がるので情景にはふさわしい。

にとっては，新たな指導をふまえなくても達成できるものである。そこで，たんに俳句を詠ませ，音数や表現技法，季語の使用を確認するだけでなく，表現技法や句切れの効果や，語感による効果を期待した語の語種の分類と，期待する効果についても具体的に述べさせ，そのうえで俳句の情景についても描写させた。このように，生徒自身の語彙を見つめなおさせ，知識・技能を活用する過程を評価できるようにした。④

生徒作品と交流

1　交流の方法について

第３次第６時では，交流の学習活動に取り組ませた。コロナ禍のため，授業時間についての先行きが見通しにくい状況であったことから，句会の形式はとらずに，提出された作品の中から，筆者がそれぞれの語種ごとに以下のとおり三句ずつ選び，ワークシート（図１）に掲載するという方法をとり，授業にかける時数を短縮することとなった。

そして，生徒に語種ごとに良句と思われるものを一句ずつ選ばせ，その理由をワークシートに記入させた。グループでの交流活動に取り組

【外来語の語感を生かしたとする生徒作品】
① 夏の雨リズムを奏で落ちにけり
② ピーチティー会話弾ませ汗をかく
③ 照らされて空に光ったレインボー
【和語の語感を生かしたとする生徒作品】
④ 空と湖色とりどりの花火咲く
⑤ 夕立後水溜まりへと浮かぶ虹
⑥ ドア開けて肌を迎える日の盛り
【漢語の語感を生かしたとする生徒作品】
⑦ 積乱雲中にあるかなラピュタ城
⑧ 薫風にカレーの混じる四時間目
⑨ 海岸に打つ波夏のささやきや

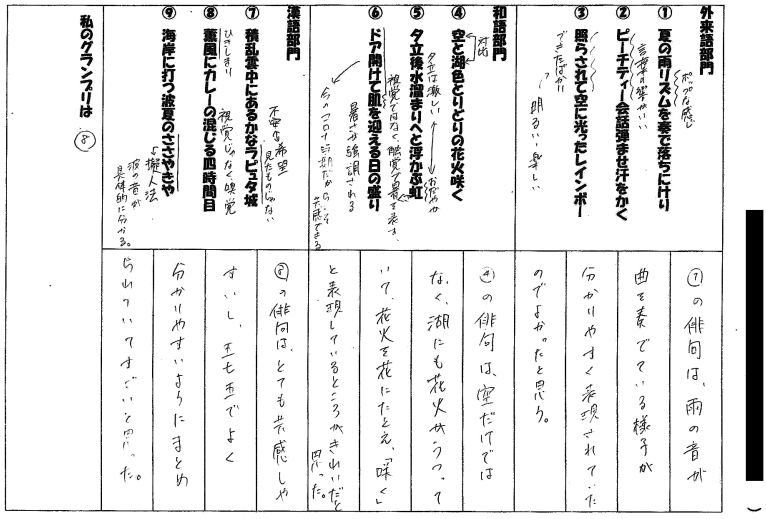

図１　生徒のワークシート・１

1，2ともに学習計画の第2次に相当するがこれらについてはすでに別稿にて紹介した[3]。本稿では第3次に相当する3についてとりあげていくこととする。

2　評価の項目と評価基準

第3次第5時では，ワークシートを配布し，以下の項目について記入させた。

○創作した俳句　○俳句に含んだ季語　○俳句の情景を描いた文章
○和語・漢語・外来語の語感を期待した語とその語種の分類
○期待する効果についての論述した文章
○使った表現技法名と句切れの有無
○表現技法や句切れを用いたことによる効果について論述した文章
○「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」のうちのいずれにうったえかける魅力をもったものなのかを選択

そして，観点別に評価対象とする項目を分け，その評価基準についてはルーブリックにまとめ先に生徒に示し，生徒と共有できるようにした（表1）。夏の季語を含んだ俳句を一句詠みあげることは，これまでも様々なかたちで短歌・俳句にふれてきた生徒たち

表1　ルーブリックにまとめた評価基準

	知識・技能		思考・判断・表現	
	俳句の基礎知識	和語・漢語・外来語	俳句の創作	情景描写
A	俳句の季節区分が理解できており，かつ自分で用いた表現技法の名称を正しく述べることができている。	創作した句の中で語感を用いた言葉の語種が，和語・漢語・外来語のいずれになるかを正しく分類でき，かつ，なぜその語種が自分の句に適しているのかを，異なる語種の類義語との違いを際立たせながら具体的に説明できている。	夏の季語を含んでおり，五七五の音数に合わせた，もしくは字余り字足らず，他の技法を効果的に用いた俳句を創作している。	自分が詠んだ俳句がどのような情景を描いたものなのかを詳述し，句の中での表現技法の使用につながるような工夫のある表現で説明できている。
B	俳句の季節区分が理解できている。もしくは自分で用いた表現技法の名称を正しく述べることができている。	創作した句の中で語感を用いた言葉の語種が，和語・漢語・外来語のいずれになるかを正しく分類でき，かつ，なぜその語種が自分の句に適しているのかを，異なる語種の類義語との違いを挙げながら説明できている。	夏の季語を含んでおり，五七五の音数を意識した俳句を創作している。	自分が詠んだ俳句がどのような情景を描いたものなのかを具体的に説明できている。
C	俳句の季節区分が理解できておらず，かつ自分で用いた表現技法の名称を正しく述べられていない。	創作した句の中で語感を用いた言葉の語種が，和語・漢語・外来語のいずれになるかを正しく分類できていない。なぜその語種が自分の句に適しているのかが説明できていない。	五七五の表現形式が意識されていない。夏の季語が含まれていない。	自分が詠んだ俳句がどのような情景を描いたものなのか，具体的に説明できていない

③　言葉がもつ価値を認識するとともに，読書を生活に役立て，我が国の言語文化を大切にして，思いや考えを伝え合おうとする。「学びに向かう力，人間性等」

3　評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①和語，漢語，外来語などを使い分けることを通して，語感を磨き語彙を豊かにしている。(1)ウ	①表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫している。B(1)ウ	①作品の交流で積極的に考えを深め，新しく学習したことの要点をふまえながら学びをふり返ろうとしている。

4　学習計画（全6時間）

節	時程	学習目標	評価内容及び方法
1次	第1時	○単元目標を把握し，学習の見通しを持つ。俳句の基礎知識について理解する。	〔主体的に学習に取り組む態度〕①観察
	第2時	○教科書収載の俳句を用いて，俳句に描かれた情景を捉え，創作の参考にする。	〔思考・判断・表現〕①ノート
2次	第3時	○和語，漢語，外来語，混種語とは何かを理解し，それらを使い分けるうえで重要なことを理解する。	〔知識・技能〕①ワークシート
	第4時	○和語，漢語，外来語の語感が俳句にどのような効果をもたらすのかを分析する。	〔知識・技能〕①ワークシート
3次	第5時	○和語，漢語，外来語の語感を用いた俳句を創作し，その効果について文章にまとめる。	〔知識・技能〕①〔思考・判断・表現〕①ワークシート
	第6時	○創作した俳句を交流し，自分の学習をふり返る。	〔知識・技能〕①ワークシート〔主体的に学習に取り組む態度〕①ふり返り用紙

単元の工夫点と評価について

1　単元の工夫点

本単元において，どのような工夫をほどこせばよいのかを検討したことを以下3点に整理した。

1和語・漢語・外来語の語感をどのようにしてとらえさせるのか。
2それぞれの語感が俳句にもたらす効果についてどのように実感させるのか。
3創作，交流の活動をどのように設定し学びを深めさせるのか。

「言葉で理解したり表現したりする際の，正誤・適否・美醜などについての感覚のこと」であり，さらに

話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で，相手，目的や意図，場面や状況などに応じて，どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直感的に判断したり，話や文章を理解する場合に，そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができること

を指す。

創作およびその交流という，生徒の主体性が求められる言語活動の中で，和語，漢語，外来語の使い分けをとりいれることは，解説編に「自分なりのものの見方や考え方を形成する」とあるような，「言語感覚」を豊かにすることに深く関連すると考えた。

従来，近代俳句および近世俳諧については，第３学年の検定教科書に掲載があり，改訂された中学校学習指導要領の全面実施となった令和３年度版でも同様である。なかでも，複数のものに俳句創作の学習活動について掲載があり，和語・漢語・外来語の掲載箇所と近接しているものもある。

そこで，和語・漢語・外来語の語感を用いることを条件とした俳句を創作させる単元構成を考えるに至った。[②] 俳句を創作させるだけでなく，生徒がその情景と語種による語感のちがいについて記述する活動を加えることで，第３学年「Ｂ書くこと」の「ウ　表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること」に相当することを目指した。

単元の概要（令和２年度７月実施・対象生徒数107名）

１　単元名　俳句で描く・私の「理想」の夏（第３学年　Ｂ書くこと）

第３学年の夏は，進路実現のための重要な学習の期間であるといえる。さらに令和２年度は，新型コロナ感染症の流行により８月上旬まで１学期があり，夏季休業も２週間程度に短縮された。そこで，五七五の中に自分たちの「理想」の夏を表現することを俳句創作のテーマとした。

２　単元の目標

①　和語，漢語，外来語などを使い分けることを通して，語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕⑴ウ

②　表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫することができる〔思考力，判断力，表現力等〕Ｂ⑴ウ

〈実践報告〉中学生の短詩型文学の創作から見えてくること
――和語・漢語・外来語の語感を生かした俳句創作の単元を中心に――

永　田　郁　子

はじめに

中学校学習指導要領（平成29年告示，以下も同じ）において，国語科の「教科の目標」は，「言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することを目指すとされ，「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の「三つの柱」に合わせ，３点に整理されている。なかでも「学びに向かう力，人間性等」に関する目標は「言葉がもつ価値を認識するとともに，言語感覚を豊かにし，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。」（下線は筆者による。以下の引用についても同じ。）とある。

筆者は現任校にて，平成30年度から令和２年度にかけての３年間，第１学年から第３学年を持ちあがって担当することができた。その３年間の指導の中で，上記の目標を重点とし，なかでも，短詩型文学および古典の創作の指導について中心に取り組んできた。

担当生徒らの第２学年時には「古典に表れたものの見方・考え方」である「をかし」「あはれなり」に注目させ，それらをもとに生徒独自の歳時記を作成させ，短歌創作に活用させるという実践に取り組んだ[①]。生徒が「我が国の言語文化」である古典の学習で得た「知識・技能」を短歌創作という「思考・判断・表現」の場に活かすことを目的とした指導である。

短歌や俳句の創作については，中学校学習指導要領では「短歌や俳句，物語を創作するなど，感じたことや想像したことを書く活動。」というように第２学年の「B書くこと」の言語活動例ウに記述が見られるものであるが，ここでは第３学年の実践としてとりあげる。

中学校学習指導要領国語科には第３学年〔知識及び技能〕の指導事項として，「和語，漢語，外来語などを使い分けることを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。」とある。中学校学習指導要領国語科解説編（以下，解説編）によると，「言語感覚」とは